

イースターおめでとうございます。

今年も3年前と同様、イースターがとても遅かったので、教会の近くの桜も、ほとんど葉桜です。冬の間は枯れたかのように見えた木が、春になると新しい命によみがえったような生命力に満ちた季節になる、それが春にイースターを迎える、自然からも学ばされる大切な点だろうと思います。

さて、今日の福音書にはイエス様は登場しません。イエス様が金曜日の午後なくなり、弟子たちは、日没までに急いで遺体を墓に納めただけで、全く死体に香油を塗ったりできませんでした。土曜日は一日安息日で外出もできず、婦人たちは日曜日の朝早く、墓へ行ったのです。

しかしイエス様の墓は空っぽで、天使と思われる二人のひとが「なぜ、生きておられる方を、死者の中に探すのか？イエス様は復活して、ここにはおられない。」と告げたというのです。

この聖書の箇所から私たちは何を学ぶのでしょうか？

私たちは、イエス様の死体を求めている婦人たちの行動が、天使たちの指摘したように、間違ったところにイエス様を探してしまっていることを、気づくことが大切なんだろう。本当の、私たちが探し求めるイエス様は、墓とは別の所におられる、ということ覚えておく必要があるように思います。

『なぜ、生きておられる方を、死者の中に探すのか？』という指摘は、今日の重要な言葉だと思います。

もう、20年ほど前に流行した歌ですが「千の風になって」というのがありました。

「わたしのお墓の前で、泣かないでください。そこにわたしはいません。死んでなんかいません」という歌い出しでした。

復活の日の朝、婦人たちが会った二人の人は、まさにそれを言っているのでしょう。

「イエス様のお墓の前で、泣かないでください。そこにイエス様はいません。死んでなんかいません。」というわけです。

イエス様は、過去の人物として墓の中に入ってしまったてはない、ということ今日の福音書は私たちに教えてくれているのです。このイエス様の復活について、どう考えたらいいか、面白いたとえがありました。それで、それを紹介したいと思います。

死んだ人、というのは、たとえばそれが偉大な人物である場合、偉人伝のような、何か模範的な生き方をした人物として、紹介されることがあります。その人が、人生で何度もつまづき、いろいろ失敗をした人ならいいのですが、お手本があまりに立派だと、わたしたちは、その偉人と私との違いに愕然とすることがあります。たとえば、私が前にいた宗像に關係のある有名人としては、弘法大師空海が、字を書くのがうまかった、ということで、「弘法は筆を選ばず」とか、逆に「弘法も筆の誤り」ということわざもあります。立派な人の代表でしょう。

空海の映画を見ていたら、北大路欣也が演じた空海と、彼と一緒に留学した、石橋蓮司が演じた橘逸勢（たちばなのはやなり）、それに、彼らが帰ってきてから、天皇になった、(3年前に亡くなった西郷輝彦が演じた、嵯峨天皇の三人が、実は書道の歴史の中で、有名な三人なんだそうですね。三筆と呼ばれるそうです。後で三筆のことを知ったので、びっくりしたのですが、同じ時代に生きた人が、有名な書道家でもあったんですね。まあ、映画の話はそれくらいにして、問題はお手本です。

私たちが小学校などで、書き方の勉強をする時、最初にとってもきれいな文字が書かれていて、その下に、点線でその字の書き方のヒントがあります。そして、その下には、それらのお手本を参考にして、自分で字を書くように、書き方の練習帳ができています。

しかし、お手本の通り、いくら努力しても、小さな子どもには、とてもその真似はできません。お手本と自分の違いに、愕然とするだけです。死者のお手本、というのは、弘法大師がいくら立派な字を書いても、私にはとても手の届く相手ではありません。

ところが、苦勞しながら練習していると、担任の先生が私のところにやってきて、手を取って、格好よくかいてくれると、それに従いながら、まあまあの字が書けるようになる、ということです。

死者というのは、書き方練習帳の上に印刷されたお手本だけど、生きた先生は、私の手を取って、一緒に書いてくださる方、私と一緒に歩んでくださる方、ということだろうと思います。

今日の福音書に続くお話は、復活の日の午後、二人の弟子がエルサレムから西へ、60スタディオン、およそ11キロあまり行ったエマオという町へ歩いている時のお話です。二人で歩いているとひとりの人が加わって、あれこれ聖書の説明をその人がしてくれるのです。そして、食事の時、その人がパンを取って賛美の祈りを唱えて、パンを裂いて渡してくれている姿で、ふたりはそれがイエス様だと分かったという話です。

イエス様は、単なる過去の偉大な人物ではなく、私たちと共に歩き、私たちを養ってくださる方だ。その方こそが、生きた方なんだ。それをこの著者は言いたいのだろうと思います。

イエス様は、わたしたちが単に本で学ぶような、死んだ方ではなく、私たちが祈ったり、対話し、パンの形で養ってくださる、生きた方である、ということを経験できる時、わたしたちは、本当に主イエスはよみがえられた。生きて私と共にいてくださっている、と証しできるのではないのでしょうか。

今週洗礼の記念日を迎える、ひとたちは、おそらくみんなイースターに洗礼を受けたのでしょう。私も3月29日ですがイースターに洗礼を受けました。洗礼を受けて、クリスチャンになるとはどのようなことか、改めて、お話ししたいと思います。

遠藤周作という、もう29年前に亡くなった作家ですが、この人が「おバカさん」という小説を書きました。その小説のモデルになった、カトリックの神父さんに、ジョルジュ・ネランという人がいます。この人は、東京大学などで教鞭をとった、優秀な神父さんです。2月の教区報に書いたのですがその話。

この人が「おバカさんの自叙伝半分」という本を書きました。この人は日本人に伝道するためには、サラリーマンが集まるスナックでバーテンをしながら聖書を説こうと、東京新宿歌舞伎町にスナックエポペというのを開いて、働いていました。この人も14年前に亡くなったのですが、その人の本の中に、とても分かりやすいキリスト教の説明がありました。

「キリスト教徒はイエスのファン」ということを書いていました。イエス様が好きで、イエス様のことに夢中になっているのが、クリスチャンだ、ということです。

あとは私がそれから連想することですが、ファンには2段階あると思います。最初の段階は、好きなスターを追っかけて、その人のことを知りたい、身近に感じたい、という段階でしょう。クリスチャンは、イエス様のファンですから、イエス様のことを知りたくて、聖書を学び、また関連の本を読んだり、イエス様の生活された所へ行きたい、ということで、今はなかなか難しいですが聖地旅行をしたりします。私も5回行きました。しかし、いくら旅行にお金をかけても、これらの行動は未だ、第1段階。

しかし、第2段階があります。ファンというのは、ただスターの追っかけをしているだけでは、満足できなくなるのです。それは、あたかも自分がそのスターになったかのように行動することです。カラオケでスターになった気で歌うのはそのよい例でしょう。

そして、ネラン神父は、キリストのファンになるのに肝腎なことは「霊性」だと言います。「肝腎なのは『霊性』と呼ばれるものだ。この奇妙なことばは、**Spirituality** の訳語である。その意味はこうだ。聖書の中にはキリストのさまざまな姿が見られるが、そのうちの一つを選びとり、そのキリスト像に従って自己の信仰を実践することである。」『おバカさんの自叙伝半分』より

イエス様の復活を祝う今日、私たちはもう一度、自分もイエス様のファンとして、イエス様に夢中になり、イエス様に似たものになるように努力しましょう。

今日もイエス様の犠牲である肉と血を表す、パンと葡萄酒をいただきます。これをいただくたびに、イエス様に似たものになるように、と祈りながら聖餐に与りましょう。